

Ⅱ 報 告

ICUにおける日本語教育実習

根 津 真知子

1 はじめに

1999年度より毎年冬学期にオーストラリアのヴィクトリア州で行われている海外日本語教育実習と2003年度より再開される学内での日本語教育実習に関して、その経緯と内容を報告する。

2 ICUでの日本語教育実習

上で、「2003年度より再開される」と述べた通り、実は、学内での日本語教育実習は約50年も前の1956年から既に正規の履修科目として教えられていた。その前年の1955年から始められている日本語教授法は現在に至るまで継続しておこなわれているが、教育実習は10年後の1965年度が最後でその後はおこなわれていない。その間の経緯を『あすの日本語教育の道を求めて－ICU日本語教育30周年記念』の「ICU日本語教育の30年」の中で故小出詞子先生が次のようにお話なさっていらっしゃる。

その外に専門プログラムというのがありますが、これは一番はじめはスタッフ養成のためということで始めました。資料にありますように1955年からはじまって、1単位ずつ、ささやかながら実験的に始めました。第2年目からは、教授法を終わった学生に実習という講座をもうけ、教師が監督をして、実際のクラスに行って教えるということをいたしました。ところが、この教授法のクラスの学生が段々増えてしまい、実習を続けていくと外国人の学生はいつも実習生に習うという結果になりかねなくなり、この実習は、発展的解消ということになり（中略。。。）今クラスの中で模擬実習というものをやっていますが、これが大きなネックになっております。先生を採用する側としては、どうしても経験がほしいということになりますが、模擬実習では経験にならないわけで、。（p.7）

ここで触れられている教授法受講生数、そして教授法科目を履修した後の実習受講生の増加の推移は、この講演時の配付資料によれば以下のようになっている（筆者が教授法と実習部分のみを抜粋して作表）。

年 度	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65
教授法	5/6	7/6	1/5	19/12		9/11	9/8	10/9	16/13	16/14	35/27
実 習		6/4	2/2	5/5	6/6	7/7	2/2	7/8	12/7	13/11	8/6

両科目とも原則的に第2学期と第3学期に行われ、2学期間履修する学生が殆どである。確かに、教授法受講生数は58年度から10数人となり、65年度からは急増して30人以上、そして筆者が作成したこの表では示さなかったが、72年度頃からは毎年50人以上が履修している。実習も、その数は年々徐々に増え、63年度と64年度は10人以上になり、「実習を続けていくと外国人の学生はいつも実習生に習うという結果になりかねなくなり」、当然の事であるが本科生のための日本語教育の質の維持を最優先させて、実習は「発展的解消」となったのであろうと推察できる。

国内の他大学では、ようやく80年代後半から日本語教員養成を主目的とする学科が設置されるようになり、89年には約70大学（学部）、大学院において養成教育がおこなわれるようになった。そしてその2年後、1991年3月には国立国語研究所から出された「4年制大学における日本語教員養成の現状」についての調査研究の中で、すでに日本語教育実習に関しても触れており、本学の他には広島大学、上智大学、お茶の水大学、大阪大学、東京外国語大学、筑波大学、横浜国立大学が各々報告をしている。留学生受け入れを推進し、日本語教育を充実させつつ日本語教員養成にも力を注ぐこれらの大学でも本学と同様に、実際の教育実習というより教授法の一環としての模擬実習が殆どで、留学生に対する日本語教育の質的維持を優先するために学内での実際の教育実習が困難であることを窺わせている。そして、教育実習問題の解決方策として、海外での実習、あるいは国内／学内にいる正規留学生ではない日本語学習者に対する教育実習が行われていると報告している。

本学においても、海外教育実習の可能性を模索し始め、オーストラリアのヴィクトリア州教育省と提携して1999年度より正規の3単位科目として中等教育での日本語教育実習を実施している。この科目概要を時間軸に沿って示すと以下のようになる。

前 年	9 月（秋学期）	日本語教授法 I 履修
	11月中旬	ヴィクトリア州教育省担当者との面接
	12月（冬学期）	日本語教授法 II 履修 海外日本語教育実習 履修 毎週1コマ（70分）教科書分析、教材作成、 模擬授業
次 年	3 月（3 週間）	ヴィクトリア州中・高等学校での実習 本学の担当教員による実習授業見学
	4 月初旬	実習生による報告書提出 派遣校指導教員による評価報告 本学の担当教員による成績付け

前年度の秋・冬学期に日本語教授法I-IIを履修して、次年度の冬学期に海外実習に参加す

ることも可能であるが、上に示したような履修者が殆どである。

今年度も含むと30人以上の学生が海外実習を経験し、参加学生達から非常に高く評価されている科目であるが、当初から次のような解決困難な問題をかかえているのも事実である。

- ・ 学生の参加実費負担（約30万円）が大きい
- ・ オーストラリアの学年暦上、実習期間が3月であるため、卒業見込みの4年生は単位が卒業に間に合わなくなり、参加が難しい（単位を取得しなければ、参加可能）
- ・ 参加する学生は3年生か2年生になる訳だが、3年生にとって非常に大切な3月の就職活動ができなくなり、実習と就職活動の両立ができない
- ・ 大学生を対象にした本学での日本語教育プログラムの授業見学などを重ね、また交換留学生のチューターを課せられ、大学での日本語教育にのみ接している学生にとって、中・高等学校での教育に必要な知識・実践能力が不十分である

これらの問題にも関わらず、実習生による報告を見ると海外実習の意義は非常に大きいと考えられる。日本語教育体験のみでなく、多民族国家オーストラリアでの中等教育、異言語および異文化接触など、非常に充実した3週間であると言える。これから増々進むグローバル化の中、海外教育実習体験を望む学生は増加する可能性も十分考えられる。

その間学内では、教授法の活動の一環として行っている留学生への日本語チュートリアルを教授法修了後も自発的に続けたり、夏期日本語教育の受講生のためにボランティアとして活動する学生達で、将来日本語教師を目指す学生の中から自主グループ「たまごの会」が生まれ、研究会やネットワーク作りが始まった。

そのような状況の中、2000年度よりフランスからの International School of Management, MBA の約50名の学生が3ヶ月本学で研修するプログラムが始まり、日本語教育を希望する学生たちに週2コマ、約20コマ（単位認定なし）教えることとなった。また、02年度からはロータリー世界平和奨学生（大学院）を受け入れているが、このプログラムには日本語教育は必修とはなっておらず、学生たちからの要望によって急遽週2-3時間の日本語チュートリアル（単位認定なし）が組まれることとなった。彼等のような日本語学習が目的ではない大学院生にとっては、週10コマ（集中日本語は週20コマ）の6単位のコースを履修することは時間的に非常に困難であるが、せっかく日本に滞在するのであるから非常に初歩的な日本語であってもそれを身につけ、学内外での日本語でのコミュニケーションを達成したいという希望をもっていることが分かったのである。この二つのプログラムでの日本語教育に積極的に関わってくれたのが上に述べた「たまごの会」のメ

ンバーであった。かれらは、学習者のニーズにそった教材作成から実際の授業まで、日本語教授法担当教員の指導のもと積極的におこない、その成果を示した。

このような経緯を踏まえ、本学での正規の日本語教育を時間的制約などの事情により受けられない学内の学生たちの中から日本語学習希望者を募り、その人たちを対象とした2単位の日本語教育実習科目が30数年ぶりに03年度から再開されることとなった。実習科目に登録できる学生に「日本語教員養成プログラム修了間近の日本語教授法I-II修了者で、優秀な成績を修めた学生」という条件をつけることにより、将来日本語教育に携わることを見込んでいる優秀な日本語教師の「たまご」たちに、経済的に過重な負担を強いることなく4年次でも履修できる道が開けたことになる。この実習科目概要は週1コマを担当教師とクラスメートとのディスカッション及び実習の準備、実習後の反省会にあて、そして週2コマを実習するという内容になっている。

日本語教師を目指す学生たちのために学内での日本語教育実習をそれまで学んできた日本語教育に関するさまざまな知識を総動員して実践できる場とし、今にも増して本学からより質の高い日本語教師を送り出すことができる体制がようやく、故小出詞子先生のお話から20年近く経て、整ったのである。

参考文献

- 「あすの日本語教育の道を求めて－ICU日本語教育30周年記念」、凡人社、1987年
- 「日本語教育の内容と方法についての調査研究」資料6『4年制大学における日本語教員養成カリキュラム』、国立国語研究所日本語教育センター第一研究室、1990年
- 「日本語教育の内容と方法についての調査研究」資料7『4年制大学における日本語教員養成の現状』、国立国語研究所日本語教育センター第一研究室、1991年
- 「日本語教育の内容と方法についての調査研究」資料8『日本語教員養成における海外教育実習プログラム』、国立国語研究所日本語教育センター第一研究室、1992年